

◎クメール美術の入門書!! 〈保存版〉

古代クメールの神像

— Gods of Ancient Khmer —

監修 金子 民雄

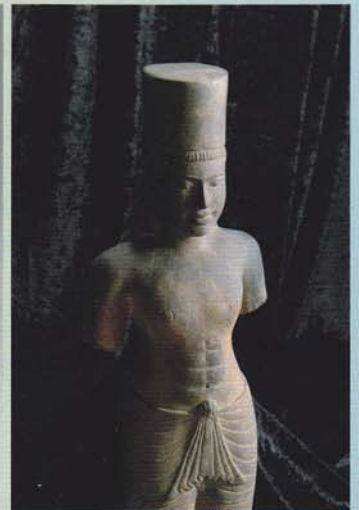
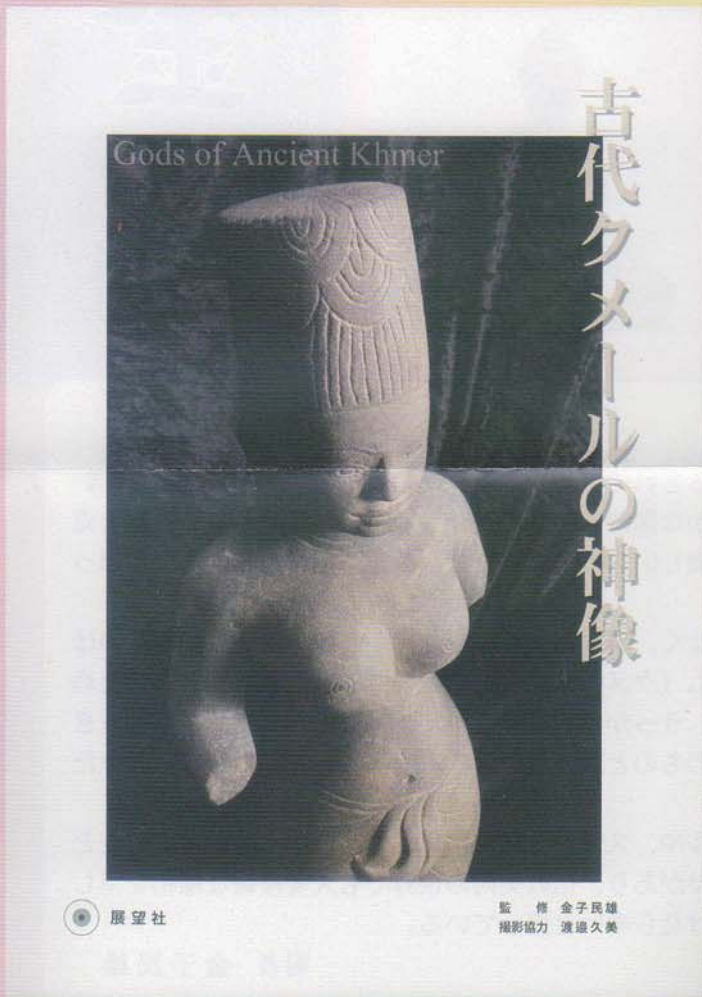
撮影 渡邊 久美

クメールは、西暦紀元前後のごく早い時期から、メコン川の中下流域に沿って、インド文化の強い影響下にあり、北は現在のラオス、西はタイの領域にと大きく領有していた。しかし時代が下るにつれ次第に勢力は小さくなり、現在は以前の三分の一程度の領土の小さなものになってしまった。

クメールにふれる場合、なんと言ってもかつて大いに発展をとげた文化遺産が主となる。とくに石造りの建築物と、これを飾った装飾彫刻やら彫像が中心となり、議論は政治や社会経済などではなく、これら文化財が専ら議題となる。木造品も当然あったはずであるが、熱帯地方特有の多雨多湿地帯のため大半が朽ちて遺らず、粘土、ラテライト（紅土）、砂石岩のものに限られてしまっている。

このように八、九世紀以降、十二世紀に大いに発展したクメール文化も、十四世紀から繰り返し隣国タイのアユタヤによる侵犯行為によって衰亡に向い、とうとう二度とかつての文化的再興は果たし得なかった。そして、十九世紀末、フランスの植民地の統治下に入ると、皮肉なことにクメールの文化遺産の調査研究は大いに進められるようになったが、クメール人による自国文化の再認識はすっかり遅れてしまったようだ。そして第二次大戦が終ったものの打ち続く国内の戦乱により、多くの貴重な文化財は失われてしまった。

金子 民雄



定価 3,000 円 (税別・送料別)

- ◇ B5判・本文 62 頁・図版オールカラー・並製本
- ◇ お申し込みは、ハガキ、TEL、FAX にて (書店注文可)
- ◇ お支払いは、商品が届いてからの後払い (局振替用紙)

〈発売〉 展望社

〒112-0002 東京都文京区小石川 3-1-7

TEL 03-3814-1997 FAX 03-3814-3063

〈発行〉

佛教図書出版
CD・DVD制作

USS出版

〒175-0005 東京都豊島区南大塚 3-1-6

TEL 0120-482-471 FAX 0120-482-472

『タイの黄金仏』『古代クメールの神像』を出版した

かねこ 金子 氏
たみお 民雄 氏



▲金子民雄(かねこ・たみお)氏=1936年東京生まれ。歴史学博士。大学卒業後、中央研究院に在籍し、『タイの黄金仏』『古代クメールの神像』など著書多数。訳書に『ヘンリック・ヤンクハスバンドの日記』など。

近年、仏像ブームなるものがにわかに取り沙汰され、若い世代にも仏像鑑賞が広まっているようだが、日本の寺院あるいは展覧会で目にすることもとは異なった海外の仏像についてはどうだろうか。『タイの黄金仏』『古代クメールの神像』という二つの書

いい仏像は見る者の心に語りかけてくる 仏像を追うことで明らかにする、世界の横のつながり

籍で仏像を紹介した歴史家の金子民雄氏はこう語る。「東南アジアは、かつてスリランカ経由で伝わった南伝仏教の世界で、人々は小乗仏教を信仰していますが、日本でタイやカンボジアの仏像について書かれた本は少ないんです。なぜかという点、時代ごとに地域ごとに仏像が全く異なっていますから、時代と地域によって顔、形が大きく変わるんです。分類が非常に細かいから、いざまとめるとなると大変厄介な作業なんですよ。」

「たとえば、タイのアヌタヤから仏陀を救ってくれたとい

う、インドのナーガの神話がらきています。ですから、この仏像一つをとっても、同じ仏教でさまざまな繋がりが見えてくるんです。同じロブリー様式の仏像で蛇の上に座っていて、手に三角形の器のようなものを持っているものがあります。これはついでに見落としてしまっただけでも、どうもお茶の葉を入れた器ではないかと思われま

す。タイ族がやってきた雲南はお茶の産地ですから、当時、お茶は葉のままからね、だからこれはいわゆる薬師尊に喩えよう。仏像一つひとつを追いかけていくと非常に面白いですね。奈良の大仏開眼供養のとき、聖武天皇は参列者に茶を配ったと言われているから」

「日本の奈良、鎌倉時代に集中している。南伝仏教は日本には伝わらなかったと言われているが、日本の仏像とのつながりは気になるところだ。」

「日本とタイやクメールの仏像(神像)を比較している人はあまりいないようですね。なぜかと言うと、日本にはそれらの現物が少ないからで

す。たとえばカンボジアでは戦争や動乱が続き、支配団体のフランスがいもいもはすべで持ってしまった。そのおかげで、保存状態のよいものは残されてはいませんが、門外不出ですから、なかなか日本人は目にする事ができません。タイの仏像は奥が深いんですよ。どうも日本人は、ある時代のものに基づいて好きになると、その系統に集中してしまう。同時並行的にさまざまなものが生まれているのに、他にはあまり関心を示さず、比較が進むと、とんでもない事実が浮かび上がってくる可能性がある。だから、こ

ろを踏み入れたのだろう。アジアの各地へと足しげく調査に出向いている金子氏だが、そもそもなぜ仏像の世界に足を踏み入れたのだろうか。「これまでに仏教の遺跡はずいぶんと見てきました。特に廢墟となっている寺院を多く見えています。ヒンドゥー教徒もイスラム教徒も仏教寺院

をつぶしてきましたから、そこを見て回っていました。ヒンドゥー教と仏教は仲間なんだけれど、インド人と仏教とは精神的にそりが合わないようです。仏教はもっともは禁欲的ですからね。」

とあるインド人に、かつてこう言われたことがあります。『日本に仏教は借り物なんですよ。それは仕方ないですよ。その通りですから。さらに、日本人は明治以前には仏教の本場に戻って行っていい。仏教が日本に入ってきたから千数百年のあいだ、日本人は主に自分たちのイメージだけで仏像を作ってきた。だからそれは本物の仏像じゃない』と言われたときには少し腹が立ちましたけれど、こちらの心に語りかけてきますよ。」

「はじめは仏教圏に行っても仏像の世界には手を出さまいと思っていました。私は美術師ではないですし、商売で各地に行っているわけでもない。けれども、その彼に「本物をよく見てみる、語りかけてくるから」と言われたことが忘れられませんでしたよ。それ以来、仏像を見る目が変わりました。ただ、すぐにわかることではないのは確かです。でもね、これは非科学的だけれど、いい仏像は本当に



▼金子民雄監修『タイの黄金仏』7・10刊 B5判六八頁・本体三〇〇〇円・展望社
▼金子民雄監修『古代クメールの神像』1・30刊 B5判六四頁・本体三〇〇〇円・展望社